

# 出会いの場面における話し手の言語行動選択

長谷川 頼子

キーワード：出会い、言語行動、行動の選択、質問紙調査、社会人層

## 1. 研究の概要

人と人が対面的に互いの存在を認識する「出会い」の場面においては、一般には定型的なあいさつ言葉の交換を行うと考えられる。そのあいさつ言葉にもさまざまな形式があるが、それに関してはすでに大きな興味が払われ、数多い記述がなされている。

しかし、ひとくちに「出会い」といっても、場면을構成する要素はその都度異なったものになるので、あいさつ言葉の形式だけでなく、我々が選択する言語行動のあり方そのものもまた異なるものになると考える必要がある。例えば、待ち合わせに遅れて行って、まずは「遅れてすみません」と謝罪することもあるし、また別の場面では、歩いてきた相手に気づかないふりをしてすれ違い、相手との接触自体を回避したりすることさえある。これらは、ランダムに発生する行動ではなく、明らかに話し手の場面に対する判断によってすべて選択された「結果」であると考えられる。このような事実をふまえると、「出会い」という場面に対して、どんな「ことば」を言うかという、言語形式に着目した観点だけでは、行動の全容をつかむことは難しいのは明らかである。

本稿では、2002年8～9月にかけて行った、出会いの場面の言語行動に関する質問紙調査の結果から、社会人層を対象としたデータ分析を行う。分析の観点として、上記の問題意識をふまえ、①あいさつ行動や場面に対する話し手の意識、②行動そのものの有無、③言語行動の種類、④言語行動の機能を立て、それぞれについて考察する。

本稿では特に、言語行動に対する考え方として「話し手の場面に対する判断が、その結果としてどのような選択的行動をもたらすか」に着眼する。単に言語形式の選択条件ではなく、行動の選択そのものの多様性について論じ、話し手の言語行動がどのような要素と関わって実現されるかを考察の中心的課題とする。

## 2. 先行研究

言語行動を記述するための観点は、これまでに南不二男(1979)や国立国語研究所(1984)などをはじめとして、継続的に検討と指摘が行われている。本稿で扱う出会いの場面に関するものとして、鈴木孝夫(1981)、沖久雄(1985)、甲斐陸朗(1985)、比嘉正範(1981)などがあり、その一方で、あいさつ行動に関する数量的な把握に大きな関心が寄せられ、多くの調査研究が行われてきた(小林祐子(1981)、国立国語研究所(1984)、馬瀬良雄他(1988)な

ど)。

鈴木孝夫(1981)は、あいさつの言葉を機能的側面から分類することによって、また沖久雄(1985)はあいさつの言語形式が生成されるプロセスを重層的に示していくことで、あいさつの研究が、単なる言葉や表現の収集ではなく、言語行動として検討されるべき課題を持つものと示している。比嘉正範(1981)や甲斐睦朗(1985)は、あいさつ行動に関わると考えられる要素を数多くあげ、現象に即した多角的な分析の必要性をいずれも論じている。

こうした分析の観点自体を論じる傾向が 1980 年代に色濃く見られた背景には、言語行動というものに対する関心の強まりが、主に理論的・方法的、すなわち「言語行動をどうとらえるか」という問題のとりあつかいとして表れたことによると思われる。

その一方で、数量的に実際の傾向を把握しようとする調査研究では、ある場面における言語行動に対して、「どんな言葉を使うか」という立場からの記述が行われ、特にことばの丁寧さの分析に深く関連してとらえられてきた。どういう相手に対して言語行動を行うかという対人的要素は、待遇表現的用法に深く結びついており、とりわけ日本語の場合、表現形式の分化が際だっている。そのため、どのあいさつ言葉を用いるかに関して、例えば「ウチ・ソト」とか「上下関係」などの概念との関わりからしばしば論じられてきた。特に、大規模な数量的調査の場合、これらの要素を設定した言語形式の選択肢をあらかじめ与え、「これこれの場面ではどんな言葉を使うか」という設問方法を用いることによって、対人的要素と言語形式の相関的傾向を把握するのに成功している。

篠崎晃一・小林隆(1997)では、買物場面におけるあいさつ行動に関して、「あいさつ自体をするか否か、するとしたら何というか、その言語形式のもつ機能はどうか」という各観点から、全都道府県を対象にしたアンケート調査の結果に基づき地域差と世代差を考察している。ここでは「あいさつ言葉の形式を問題にするのみでなく、「形式以前の段階として、あいさつ自体の有無にも注目すべき」という問題意識が提示されており(p.82)、言語行動に対する視点として重要な指摘であると考えられる。

そこで、さらに「あいさつすること、しないこと」がどういう意味をもつ行動であるかを考える必要がある。上記のアンケート調査では、場面が買物に限定されているが、買物とはそもそも相手(店員)と相互に一連の手続きを行って成し遂げる行為であり、その意味で相手との絶対的な接触が前提となっている。このような場面では、あいさつの有無そのものが、コミュニケーションの成立に関わる重大な意味を持たないのかもしれない。しかし本稿で扱うような、普段の言語生活で経験するさまざまな人との「出会い」を対象とする場合には、やはり言語行動が果たす機能の多様性に着目していく必要がある。

西尾純二(2000)にも指摘があるように、「個々の言語行動によって何が起こるか」という問いは、言語行動に対する考え方そのものに深く関わる、重要な観点であるにもかかわらず、具体的な分析における言及は多くない。本稿では、それぞれの言語行動により何が起こるかという観点、すなわち出会いの場面における話し手の選択結果としての言語行動が、その場でどのような意味づけをなすのかについて、分析の観点と関連づけて検討する。

### 3. 分析の観点

話し手は、出会いの場面に直面したとき、とっさに相手や状況などの場面的条件を判断し、その判断に基づく行動をとることになる。その結果は、個々の言語行動となって相手である聞き手に働きかける。つまり、言語行動は場面と結びつきつつも、話し手が場面をどうとらえたかによって、その都度作り出されていると考えられる。従って、「ある言語行動によって何が起こったのか」を理解するには、言語行動が作り上げられる過程において、どのような要素が関わっているのかを把握することが不可欠となる。

本稿では、データの分析に先立ち、この点に考慮して次の項目の観点を立てた。以下にそれぞれ概要を示す。

- (1) 「出会い」という場面でのあいさつ行動に関する話し手の言語意識
- (2) 出会いの場面における話し手の言語行動の有無
- (3) 出会いの場面にみられる言語形式の種類
- (4) 出会いの場面にみられる言語形式の機能

#### 3.1 「出会い」という場面でのあいさつ行動に関する話し手の言語意識

(1)の「話し手の言語意識」とは、ここでは出会いの場面におけるあいさつ行動を話し手がどのように考えているかということの意味する。例えば、あいさつという行動そのものを、より重要なものと考えている場合と、そうでない場合とでは、あいさつ行動への心理的動機付けが異なっていると言える。このような考え方には、南不二男(1979)の「言語行動のモデル」があり、言語行動を行う主体(話し手)自身の意向を、言語行動を作り上げる要素の一つに挙げている。そこで、今回調査した社会人層の主体的意向の傾向を把握するため、①あいさつ行動の儀礼性や重要性を認識しているか、②相手との接触に対して積極的であるか、③相手とどの程度・どのように接触するか、の3点を取り上げる。

#### 3.2 出会いの場面における話し手の言語行動の有無

(2)の「言語行動の有無」とは、話し手自身の判断によって、何らかの言語行動を行うかどうかという点についてである。場面によっては、相手との接触を行うか、回避するかという意味での選択になり、コミュニケーションの実現自体を左右する重大な結果をもたらす。そこで、言語行動の有無が、出会いの場面的特徴との関わりによって、どのような意味づけの違いが発生しうるのかについて、あらかじめここで整理しておきたい。

本稿で扱う「出会い」とは、人と人とが対面的に接触する場面的ことを指している。それは、出会った時の相互の状況によって、それぞれ異なる場面的特徴をもつことになる。状況にもさまざまな要素が含まれるが、以下では、出会いの状況が対立的に異なる場面的

特徴として、「偶然の出会い」と「相互に待ち合わせた出会い」について考察する<sup>1)</sup>。

### 3.2.1 偶然の出会い

まず、偶然出会った場面では、話し手は相手を認識した上で、相手に働きかけるような何らかの行動をするかどうか、場面的条件に基づいた判断を行う。その場で「する」と判断した場合には、さらにそれをどう表出するかを判断し、その上で具体的な行動を選択することになる。行動は必ずしもことばで表されるとは限らない。軽い会釈や、手を振るなどの非言語行動が選択される場合もある。また、ことばの行動になるとしても、必ずしもあいさつ言葉が選択されるとは限らないが、いずれにしても、相手に対し明示的な働きかけが行われ、結果として接触が遂行される。

一方、「しない」と判断した場合には、相手に気づかないふりをしてそのまますれ違い、結果として、相手との接触そのものを回避することになる。これを「無視」の行動だととらえれば、厳密には「何もしない」という言い方は正しくないが、「する」「しない」という対比で判断したと考えれば、両者の結果を接触の「遂行」と「回避」という対立した意味づけでとらえることができるため、本稿では「する」「しない」という呼び方をする。

### 3.2.2 待ち合わせた出会い

待ち合わせた場面では、出会うことが約束されているため、偶然の出会いと異なり、相手との接触が必ず起こるという前提がある。従って「何もしない」という選択があった場合には、接触自体を必ずしも回避するわけではなく「相手が何か行動してくるまで、自分からは積極的に相手に働きかけない」という意味にもなる。また、待ち合わせた場面には、相互に了解している接触の目的が必ず存在する。例えば、「夕方、久しぶりに会う約束をしていた学校時代の後輩と駅で待ち合わせて会う」(設問⑩<sup>2)</sup>)とか、「休日、遊びに行く約束をしていた親しい友人が、車で迎えに来た」(設問⑪)などの場合で、具体的には約束の内容に相当する。この文脈は、待ち合わせた場合だけに見られるが、相手と出会った時にどうするか判断する際には重要な要素となる。例えば、昼に食事をとるために待ち合わせて、その時間に遅れてしまった話し手は、「ごめん」とか「遅くなってすみません」という謝罪の言語行動をとる。この場合にあいさつ言葉が選択されないのには、出会う前から設定された約束の存在が考えられ、この文脈を背景に、「自分が約束に遅れた」という場面に対する負荷が、謝罪という行動選択の動機づけになると考えられる。約束に遅れなければ、あいさつ言葉も選択されうることから、この場面においては「どう表出するか」の判断以前に、「何を表出するか」に関する判断が行われていると仮定でき、その判断には「待ち合わせている」という文脈が深く関与していると思われる。

<sup>1)</sup> この観点は比嘉正純(1981)にも挙げられている。

<sup>2)</sup> 調査の概要(4章)に示した質問紙の設問番号に相当する。

### 3.3 出合いの場面にみられる言語形式の種類

(3)の「言語形式の種類」とは、相手に何らかのことばをかけるという行動を選択した場合に、どのような言語形式を用いるかという点についてである。あいさつが「習慣性・儀礼性」の高い行動であることは国立国語研究所(1981,1984,1989)の調査結果からも明らかであるが、それらは実際に言語行動の定型性という形で表れている。今回の調査は自由回答形式のため、得られる表現の異なり数が非常に多い。そこで、各言語形式の細かな差異ではなく、各々の場面と言語形式がどのような結びつきをもっているかを考察する。従って言語形式をある程度グループ化する必要がある、基準として以下の4項目(cf.長谷川頼子(2001:72))を立てた。①間投詞と②呼称は、品詞的性質をもつ項目であるが、③あいさつ語と④実質的表現は、発話構成上の順序性、および表現の形式化の程度から区別される。以上の方法で、場面に対する回答の現れ方を見る。

- ①間投詞 (例：あら、おや、まー、おー)
- ②呼称 (例：〇〇さん、〇〇ちゃん、先生、先輩)
- ③あいさつ語 (例：おはよう(ございます)、こんにちは、こんばんは、おう、よう、おっす)
- ④実質的表現 ((1)~(3)に属さない表現。例：お久しぶり、お元気ですか、おまたせ、何してるの、元気?、いた!、暑いね、行こうか)

### 3.4 出合いの場面にみられる言語形式の機能

(4)の「言語形式の機能」とは、(3)の形式的分類に対して、各言語形式が担うコミュニケーション上の機能についてである。3.8 に挙げた4つの分類項目を例にとって考えてみたい。①間投詞や②呼称は、実質的な表現内容をもたず、単に相手の注意を喚起する働きかけの機能をもつものである。③あいさつ語は、出会った時間によって「おはよう」や「こんばんは」などの表現の使い分けが見られるものの、文字通りの意味を既に失い、儀礼的に相手とのコミュニケーションの開始を指示する機能をもつと考えられる。④実質的表現は、「お久しぶり」や「お待たせ」のように、定型化が進んであいさつ語に近い表現もあるが、「お元気ですか」「何してるの」「いた!」のように、ある程度実質的な内容を伴った表現である。従って、発話のおうむ返しを許容するあいさつ語とは異なり、聞き手は基本的に話し手と同じ発話で返すことができない。こうした表現は、場合によっては「質問」や「謝罪」、「労い」や「感謝」などの具体的な発話行為を伴う。これらの各表現がもつ機能についても、出合いの場面との関わりから整理する。

## 4. 調査の概要

本稿で分析するデータは、2002年8~9月に実施した質問紙調査法によって得た資料の一部(社会人層を対象とした調査結果)を使用している。以下に概要を示す。

調査方法は、関東在住の調査協力者(千葉県在住の大学生)9名に、本人及びその家族、

さらに友人・知人へと調査対象を拡大して配布と回収を依頼するやり方をとった。今回は多様な属性からデータを収集する目的があったので、複数の世代を含むと思われる、大学生の家族（両親・祖父母など含む）にも依頼した。これにより、調査対象の属性の多様性が確保されたが、サンプルは大学生の家族構成に依存した偏りをもっている<sup>3</sup>。

質問紙への記入は、特定の場面における言語行動をたずねたものについては、すべて自由回答方式とした。あらかじめ言語形式を選択肢化する方法は「どんな言葉を使うか」について、丁寧なことばを用いるかなどという要素を分析するには適しているが、「どんな行動が起こるのか」を選択肢化するのは困難である。特に、何らかの行動をするか、しないかによって、結果の意味づけは大きく変わるため、設問ごとに言語行動（「ことば」）と非言語行動（「動作」）の2つの回答欄を設けた。「ことば」と「動作」を組み合わせた回答法によって、「言語行動をする」場合、「非言語行動のみする」場合、そして「何もしない」場合を少なくとも区別できる。

回収数は、238部で、属性別内訳は学生116（男性47、女性69）、主婦49、社会人65（男性32、女性33）、高齢者48（男性3、女性5）であった。今回の分析には、このうち社会人65部<sup>4</sup>のデータを用いる。今回社会人層を考察対象としたのには、(1)サンプル内の男女比がほぼ1:1であること、(2)言語生活自体が限定的である学生などに比べて、社会人の言語生活は多様な場面を想定でき、またこの層に相当する年代の幅も広いこと、(3)先行研究では学生対象の調査が多く、比べて社会人層を対象とした言及が少ないこと、などがある。

調査は、対象全体にわたり属性差、世代差、男女差などの比較をも前提として企画されたものだが、本稿では言語行動の選択に関わる問題を扱うので、それらは別稿に委ねたい。

調査項目は次のA～E<sup>6</sup>からなり、今回の分析ではAとBの集計結果を用いる。

A：あいさつについての行動意識に関する選択式設問(3.1①～④の項目に相当)

B：13の出会いの場面で話し手がどのような言語行動をするか(B1-13は設問内容)

B-1（実家で）朝起きて、いつものように家族のいる居間へ入っていききました。

B-2 朝、出かけようと家を出たら、隣の家の人があたたまいました。

B-3 仕事場の近くで、お世話になっている上司にちょうど会いました。

B-4 昼過ぎ、仕事上取引関係にある他社の若い社員があなたをたずねてきました。

B-5 仕事場に、用務員の人掃除の道具を持って歩いてきました。

B-6 休日、自分のきょうだい家が遊びにやってきました。

B-7 休日、家の近くで、顔見知りのおじいさんが歩いてくるのが見えました。

B-8 夕方、帰り際にお手洗いにいくと、ふだんあまり話さない同僚にばったり会いました。

B-9 ある日、役所の人水道工事の説明のためにあなたの家をたずねてきました。

B-10 夕方、久しぶりに会う約束をしていた学校時代の後輩と車で待ち合わせて会いました。

<sup>3</sup> 今回の調査では、社会人層に属する30代男性の回答が得られなかった。

<sup>4</sup> 60歳以上で、なおかつ現在勤労者に相当しない対象のことで、あくまで調査便宜上設定したものである。

<sup>5</sup> 出身地は次の通りである。青森県2、福島県1、宮城県11、茨城県1、千葉県19、東京都8、神奈川県3、静岡県1、長野県2、新潟県1、山口県1、徳島県1、佐賀県1、大分県1、福岡県7、沖縄県5。これらのデータには地域差が含まれていると考えるべきだが、今回の考察ではこの点は考慮しない。

<sup>6</sup> 質問紙の作成にあたっては、小野寺典子(1987)の設問内容を一部参考にした。

- B-11 休日、遊びに行く約束をしていた親しい友人が、車であなたを迎えに来ました。  
 B-12 休日、欲しい服を買いにデパートの売り場へ行くと、店員とたまたま目が合いました。  
 B-13 住民票を取りに、区役所へ行き、担当の窓口の人に必要な書類を出そうとしました。  
 C：13 の出会いの場面で聞き手がどのような言語行動をするか  
 D：さまざまな相手に対することばの丁寧さの程度について  
 E：フェイス項目（一部選択式含む）

## 5. 分析

### 5.1 あいさつ行動に関する話し手の言語意識

まず、3.1 で検討した各項目のうち、①「あいさつ行動の儀礼性や重要性を認識しているか」をたずねた結果を表したのが表1である。

ほぼ全員が、この意見に対して肯定的であることが示され、あいさつを交わすことに対する意義や価値を十分に意識していることが伺える。また、表2には②「相手への接触行動に対して積極的であるか」をたずねた結果をまとめた。その結果、何らかの形で「声をかける」と内省したものが9割以上を占め、表1に表された儀礼性・重要性の認識の高さと一致している。

【表1】 あいさつ行動の儀礼性や重要性の認識について

【表1】 あいさつ行動の儀礼性や重要性の認識について		
「あいさつ」はひとつのたしなみや礼儀だから、「あいさつ」をするのは大事なことだ(A1)		
まったくその通りだと思う	47	(72.3% 男性24・女性23)
だいたいその通りだと思う	17	(26.2% 男性7・女性10)
この意見については賛成でも反対でもない	1	(1.5%)
あまりそうは思わない	0	(0.0%)
まったくそうは思わない	0	(0.0%)
計 65		

【表2】 人に出会ったときの接触に対する積極性

【表2】 人に出会ったときの接触に対する積極性		
人と出会ったとき、あなたは自分から相手に進んで声をかけるほうですか(A2)		
常に声をかける	7	(10.8% 男性7・女性0)
かけることもあれば、かけられることもある	54	(83.1% 男性25・女性29)
あまり声をかけない	4	(6.2% 男性0・女性4)
まったくかけない	0	(0.0%)
計 65		

【表3】 立ち話の有無

【表3】 立ち話の有無		
立ち話をすることがあるか(A4-2-1)		
する	47	(72.3% 男性23・女性24)
しない	11	(16.9% 男性6・女性5)
回答なし	7	(10.8% 男性3・女性4)
計	65	

【表4】 立ち話の相手

【表4】 立ち話の相手	
誰と立ち話をするか(A4-2-2)	
親しい友人・知人	30
元同僚・同級生など	6
近所の人	6
久しぶりに会った友人	5

次に、④「相手とどの程度、どのように接触するか」として、相手と出会ったときに「立ち話」をすることがあるか、また誰と話すかをたずねた。その結果が表3・4である。

表3では回答なしが多く、正確には把握できないが、少なくとも7割以上の人が立ち話の経験があると回答しており、その相手として「親しい友人・知人、久しぶりであった友人、近所の人」などを挙げ、身近な人と立ち話をしていることがわかる。

「どんな話題を話すか」については、複数回答として「最近の状況、仕事の話、身の回りの話」などがあり、共通理解可能な話題が中心的であった。年齢層が高くなると「健康」や「家族」という回答も見られた。身近な話題について理解を分かち合うことが、コミュニケーションを図る中で相互の関係の確認や強化につながっていくものと思われる。

## 5.2 話し手の言語行動の有無

まず偶然の出会いの場合について、意識調査の結果をみる。「向こうから知っている人が歩いてきたとき、気づかないふりをしてすれ違うことがあるか」をたずねた結果を表5に、またその場合に、「誰に対して気づかないふりをするか」をまとめた結果を表6に示した。

【表5】「気づかないふり」の経験について

知っている人がむこうから歩いてきても、気づかないふりをしてすれ違うことがあるか(A-5)			
ある	36	(55.4%	男性14・女性22)
ない	28	(43.1%	男性18・女性10)
回答なし	1	(1.5%	男性0・女性1)
計	65		

【表6】気づかないふりをする相手

気づかないふりをしてすれ違う場合、誰に対してするか(A5-2)(自由回答)	
親しくない人	9(類似内容含む)
嫌いな人	8
苦手な人	4
合わない人	3(類似内容含む)
(他、自分を認識できない人、気づかないふりをする人など)	

表5では、全体の半数以上が「気づかないふり」、すなわち相手との接触を回避した経験があると回答しており、あいさつ行動の儀礼性や重要性が高い割合で認識され、積極的に声をかけると意識しつつも、実際には接触回避という行動が選択の一つにあるという事実を示している。また表6は自由回答ながら、それぞれ「嫌い・苦手な人」「面識がない・よく知らない人」そして「親しくない人」の3つに回答が集中している。これらに共通するのは、相手との関係をネガティブにとらえている点である。無視の行動がこの結果のように日常的に起こるものだとすれば、その生起には、このような評価的態度が大きく関与すると考えられる。

この意識調査の結果をふまえ、実際に場面を与えたとき、具体的にどのような相手に対し



て接触の回避が見られるかを考察するため、表7・8には、調査項目Bにおいて「何もしない」という回答が多かった5場面と、少なかった5場面の回答数をそれぞれ挙げた。

相手に注目してみると、「何もしない」の回答数が多かったのは「デパートの店員・役所の職員・親しくない同僚・自分の家族」である。「自分の家族」をのぞく3つの相手は、いずれも話し手との関係が非常に希薄であるか、もしくは一時的であり、表6の結果とも一致が見られる。「自分の家族」に対して「何もしない」という行動意識をもっていることは意外にも感じられるが、「何もしない」という選択をした背景を考えると、「家族」は自分との関係が絶対的である点で、またそれ以外の相手は自分との関係がはっきり存在しないという点で、特に相互の個人的な関係を確認したり強化したりする必要がないという共通性を見いだせる。このように相手との「関係」をどう評価するかが、行動選択のための判断につながっていると考えられる。

【表7】「何もしない」の回答数が多い5場面

設問番号	場面設定	「何もしない」の回答数(65名中)	
B-13	デパートの売り場で店員に	49	(75.4% 男性25・女性24)
B-1	朝起きて居間にいる家族に	16	(24.6% 男性9・女性7)
B-10	水道工事の説明に来た役所の人に	11	(16.9% 男性6・女性5)
B-9	退社時トイレで会った親しくない同僚に	9	(13.8% 男性4・女性5)
B-8	休日遊びに来た自分のきょうだいに	7	(10.8% 男性4・女性3)

【表8】「何もしない」の回答数が少ない5場面

設問番号	場面設定	「何もしない」の回答数(65名中)	
B-4	仕事場の近くで上司に	0	(0.0%)
B-11	久しぶりに会った後輩に	0	(0.0%)
B-5	自分を訪ねてきた他社社員に	1	(1.54%)
B-12	休日車で迎えに来た親しい友人に	1	(1.54%)
B-6	社内を清掃中の用務員に	3	(4.62%)

一方、「何もしない」の回答数が少ない5場面には「上司・後輩・他社社員・親しい友人・用務員」が見られ、いずれも非常に高い割合で話し手が言語行動を行っている。「後輩・親しい友人」とは個人的な動機によって関係が築かれており、「上司・他社社員・用務員」とは、日常的に接触がある相手である。この点で、表7にあげた相手とは異なっている。

### 5.3 出合いの場面にみられる言語形式の種類

本節では、3.3に挙げた分類項目に従い、各々の場面と言語形式がどのような結びつきをもつかを見ていく。分析の結果、言語形式の現れ方には①限られた言語形式が高い割合

で選択される場合と、②異なる表現の言語形式が数多く現れる場合が見られた<sup>7</sup>。

### 5.3.1 場面と分かちがたく結びついた言語形式の選択

いくつかの場面では、限られた少数の言語形式に、回答が極端に集中する場面があった。その程度の強いものを順に挙げてみる(以下かっこ内は回答数、パーセントを示す)。

もっとも分布が偏ったのは、「朝、家を出て近所の人に偶然会う(B・2)」場面で、あいさつ語(おはようございます・こんにちは(59名(90.8%)))にほとんどの回答が集中した。続けて「朝起きて、居間にいる家族に(B・1)」対しては「何もしない」と答えた以外の全員が、あいさつ語(おはよう(ございます) (49(75.4%)))を選択し、同様に「家の近くで顔見知りのおじいさんに(B・7)」対しても、あいさつ語(こんにちは(47(72.3%)))が多く現れた。いずれも、決まり言葉的なあいさつ語が高い定型性をもって場面と結びついている。

ただし、このような結びつきをもつのは、必ずあいさつ語になるわけではない。例えば「区役所に必要な書類を出すとき、担当者に」対する場面では、あいさつ語が見られず、実質的表現(お願いします(44(67.7%)))が多くを占めている。

このように言語形式が極端に限られる場面では、共通してその他の表現がほとんどないという特徴がみられる。このことから、ある種の場面では、話し手は何を言うかに関する判断ではなく、その場面に結びついた表現が何であるかを判断し、言語形式を選択していると考えられる。

### 5.3.2 場面に適したふさわしい言語形式の選択

一方、回答に数多くの異なる表現が見られる場面があった。その現れ方には異なるパターンが見られた。

まず「意味的に類似する複数の表現が、一定回答数を保って現れる場合」である。例えば「社内を清掃中の用務員に(B5)」対して、あいさつ語(こんにちは(11(16.9%)))の他に、実質的表現として「おつかれさま(です)(20(30.8%))」「ごくろうさま(です)(21(32.3%))」がそれぞれ現れている。同様の分布をもつ場面に、「自分をたずねてきた他社の社員に(B4)」対する場合で、「おつかれさま(です)(10(15.4%))」「おせわさま(です)(7(10.8%))」「ごくろうさま(5(7.7%))」「いらっしゃい(5(7.7%))」「どうも(3(4.6%))」などの実質的表現があいさつ語(35(53.8%))に続いて現れている。「水道工事の説明に来た役所の人に(B13)」対する場面でも、やはりあいさつ語(25(38.5%))の他に「ごくろうさま(です)(15(23%))」「おつかれさま(です)(2(3.1%))」「おせわになります(2(3.1%))」の各表現が見られる。「久しぶりに会った後輩に(B10)」対しては、「久しぶり(39(60%))」「元気?(6(9.2%))」などが見られた。

次に、「意味的類似性が低い各表現が、多数見られる場合」である。

---

<sup>7</sup>これらの違いは、杉戸清樹(1981:54)における言語行動の定型性の議論に一致する。

「車で迎えにきた親しい友人に(B11)」対しては、「ありがとう(7(10.8%))」「ごくろうさま(4(6.2%))」「ごめんね(11(16.9%))」をはじめ、一つの場面で計 20 ほどの表現が得られた。

「遊びに来た自分のきょうだいに(B6)」対する場面でも、あいさつ語(こんにちは(5(7.7%))や間投詞(おう、よう(14(21.5%)))の他、「いらっしゃい(16(24.6%))」「久しぶり(8(12.3%))」「元気?(3(4.6%))」「よく来たね(3(4.6%))」など多様な表現が見られた。

### 5.3.3 言語形式の選択と場面との関係

次に、こうした回答の現れ方のパターンと、場面との関係を考える必要があるが、場面を構成する要素は一定ではないので、単純な比較は難しい。ただ、少なくとも「言語形式が極端に限られる場合」から「意味的に類似する複数表現が見られる場合」、さらに「意味的類似性のない表現が多数見られる場合」になるほど、それぞれの場面にみられる言語形式は多様になっている。言いかえれば、多様な表現が見られる場面とは、話し手がそこで何を行うかをより自由に選択できる場面ということになる。本稿は 13 の場面に限ったデータから得られたパターンに対する考察の域を出ないが、今回得られた 3 つの回答の現れ方のパターンの違いは、場面における言語形式の選択に対する自由度、つまり制約の程度の違いというとらえ方で相対的に位置づけられる可能性がある。ただし、各言語形式が果たす役割は異なっているため、さらに機能的側面を考慮して検討する必要がある。

## 5.4 出会うの場面にみられる言語形式の機能

3.4 で検討した言語形式の機能を、本節では分析結果から次の 3 つに区別し、前節の言語形式の表れ方のパターンとの関連について考察する。

- (1) 開始を示すマーカーとしての役割
- (2) 相手へのコメントを交換して、コミュニケーションをさらに維持する機能
- (3) 何らかの発話行為により、相手に対しより実質的な働きかけをする機能

(1)は 3.3 の①間投詞、②呼称、③あいさつ語によって果たされる機能で、相手に声をかけて相互の存在を確認するとともに、接触が開始したということだけがもっぱら示される。

(2)では、④実質的表現に相当する「お久しぶり」「元気?」「最近どう?」のような、相手との再会に関わるコメントによって、単なる接触の開始ではなく、話し手・聞き手相互に共通な話題を導き、コミュニケーションを維持しようとする機能が果たされる。それに対して(3)は、「ごめんね・わるいね」「ありがとう」「おつかれさま」「ごくろうさま」「いらっしゃい」「よく来たね」「お願いします」のように、相手に対する発話行為を伴って実質的な働きかけが行われている。こうした言語行動により、共通の話題へ引き込まれた話し手・聞き手が、さらに相互の共感を深め、関係を強化する働きがなされる。

5.3.1 に挙げた「限られた言語形式が現れる場合」の場面にみられたのは、ほとんどがあ

いさつ語であることから、これらの場面で行われる言語行動は、機能的側面から見ても、相互の存在の確認や接触が行われたという意味以上の働きをもたない、いわば形式的・儀礼的行動になっている。一方、5.3.2に挙げた「意味的に類似する複数表現が見られる場合」および「意味的類似性が低い各表現が、多数見られる場合」の場面には、どちらも(2)の再開に関するコメントや、(3)の発話行為に相当する言語形式が含まれる。よってそこでは相手との共感、関係の強化といったダイナミックな相互作用がなされており、前述の「限られた言語形式が現れる場面」に比べ、形式的・儀礼的行動という意味合いは相対的に低くなると考えられる<sup>8</sup>。

「意味的に類似する複数表現が見られる場面」では、表現内容自体は場面と結びついたものであるが、「おつかれさま」「ごくろうさま」「おせわさま」のように、それをさまざまな言語形式で表そうとしている。一方、「意味的類似性が低い各表現が、多数見られる場面」では、場面に適した表現内容自体が、話し手によっていろいろなものとなり、結果として現れる言語形式が多様化している。単なる決まり文句ではなく、話し手自身がより場面にふさわしいと判断した言語行動を実現しようとする現れといえるのではないだろうか。

## 5.5 まとめ

今回、社会人層を対象とした調査結果の分析から、言語行動選択の過程において、以下の要素における判断が関与していることを述べた。

### (1) あいさつ行動に関する話し手の言語意識

調査対象全体に共通して、あいさつ行動に対する肯定的・積極的意識をもっていること。

### (2) 話し手の言語行動の有無

接触を回避することも選択の一つ。回避の決定は相手との「関係」の評価に基づく。

### (3) 出会いの場面にみられる言語形式の種類

#### ① 限られた言語形式が高い割合で選択される場合

話し手は何を言うかに関する判断ではなく、その場面に結びついた表現が何であるかを判断し、言語形式を選択している。

#### ② 異なる表現の言語形式が数多く現れる場合

意味的に類似する複数の表現が、一定回答数を保って現れる

意味的類似性のない各表現が、複数見られる

### (4) 出会いの場面にみられる言語形式の機能には、以下の3つが区別される。

開始を示すマーカーとしての役割

相手へのコメントを交換して、コミュニケーションをさらに維持する機能

何らかの発話行為により、相手に対しより実質的な働きかけをする機能

<sup>8</sup>関連する言及に Lüger(1983)があり、出会いのあいさつを含む儀礼的コミュニケーション行動の実現について「話し手の個性の制約の程度」という概念をたて、儀礼性の高い場面ほど、形式的に厳密で限定的な言語行動が要求されると説明している。

## 6. 課題

今後の課題として以下の点が挙げられる。

(1) 今後は、学生・主婦・高齢者など調査対象全体にわたって、属性差・世代差・男女差などの項目について比較を中心とした分析を重ねていく必要がある。今回レベルの異なる複数の観点により、言語行動に関わる要素のいくつかを、主にそれが作り上げられる過程の中に位置づけてとらえる試みをしたが、比較の作業を通じてそれを修正・精巧化したり、さらに新たな要素を見いだす余地が残されている。

(2) 今回の分析結果はすべて「話し手」における言語行動の問題を扱うにとどまっている。「聞き手」という立場を考えるには、それが本稿で取りあげた話し手の各々の言語行動を受けて行われるものであることを理解しなければならない。調査では、聞き手の言語行動に関する項目(C1-13)についてもデータを収集しており、分析が今後の課題である。あいさつの言語行動研究では、聞き手に関して「隣接ペア」以外に今のところ有効な説明概念がないのが現状である。話し手と聞き手の相互行為としての言語行動を解明するには、話し手だけでなく、聞き手の言語行動にも注意を向ける必要がある。

(3) 本稿の分析、および考察は、言語行動がさまざまな要素に支えられつつ、話し手の判断とそれに基づく選択という過程を経て作り上げられているという考え方に従っている。現在は、調査対象という小集団の中での考察が中心課題であるが、将来的には出会いの場面の言語行動を産み出すプロセスをモデルとして描いていくことも視野に入れていきたい。

### 【参考文献】

- 沖久雄(1985)「あいさつ言語行動分析の観点」『日本語学』4-8、明治書院
- 小野寺典子(1987)「日本人と台湾人の非言語伝達の比較対照」荻野綱男(編)『埼玉大学教養学部言語学報告』第6号
- 甲斐陸朗(1986)「日本語のあいさつ言葉の順序性」『日本語学』4-8、明治書院
- 金子尚一(1986)「言語生活から言語へ—あいさつ表現の意味・用法の調査の必要性(「すみません」のばあいを例として)」『国文学解釈と鑑賞』第50巻3号、至文堂
- 菊池章夫・斎藤耕二(1979)『社会化の理論』有斐閣
- 国立国語研究所(1981)『大都市の言語生活』三省堂
- 国立国語研究所(1984)『言語行動における日独比較』三省堂
- 国立国語研究所(1990)『場面と場面意識』三省堂
- 小林祐子(1981)「日本人とアメリカ人の挨拶行動—出会いの挨拶—」東京女子大学附属比較文化研究所紀要第42号、pp.87-110.
- 篠崎晃一・小林隆(1997)「買物におけるあいさつ行動の地域差と世代差」『日本語科学』2、国立国語研究所、pp.81-101.
- 杉戸清樹(1981)「あいさつの言葉と身ぶり」『あいさつと言葉』文化庁ことばシリーズ14
- 鈴木孝夫(1981)「あいさつとは何か」『あいさつと言葉』文化庁ことばシリーズ14

- 東山安子・ローラ・フォード(1982)「あいさつにおける言語行動と非言語行動の日米比較」  
『言語』臨時増刊号、大修館書店
- 西尾純二(2000)「言語行動における遂行義務と回避義務」阪大日本語研究 12、大阪大学大学院  
文学研究科日本語学講座、pp.57-71.
- ネウストプニー(1979)「言語行動のモデル」講座言語第3巻『言語と行動』大修館書店
- 長谷川頼子(2001)「出会いの場面にみられるあいさつ語と実質的表現」応用言語学研究 8、筑  
波大学大学院文芸・言語研究科応用言語学コース、pp.71-84
- F.C.パン・秋山高二・近藤富英(編)『言語のダイナミックス』文化評論出版
- 比嘉正範(1981)「あいさつの言語学」『言語』10・4、大修館書店.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1979)「言語行動研究の問題点」講座言語第3巻『言語と行動』大修館書店
- 野元菊雄(1984)「あいさつ言葉の原理」『日本語学』4-8、明治書院.
- 馬瀬良雄・岡野ひさの・山あつ子・伊藤祥子(1988)「言語行動における日本・台湾・マレーシ  
ア(マレー系)の比較—大学生のあいさつ行動を中心に—」『国語学』155
- 馬瀬良雄・岡野ひさの・秋山あつ子・伊藤祥子(1988)「言語行動の国際比較—日本・台湾・マ  
レーシア(マレー系)の大学生の挨拶行動を中心に—」『日本語セミナー 現代人とこと  
ば』銀河書房
- 藤原与一(1992)「あいさつことばの世界」『続昭和(→平成)日本方言の総合的研究』第三巻、  
武蔵野書院
- Aijmar,K.(1996) *Conversational Routines in English: convention and creativity*.Longman.
- Coupland,Coupland&Robinson(1992)"How are you?"Negotiating phatic communion.  
*Language in Society*21:207-230.
- R.Hopper(1992)*Telephone Conversation*. Bloomington: Indiana University Press.
- H.-H.Lüger(1983) Some Aspects of ritual communication. *Journal of Pragmatics*.7:695-711.
- D. Schiffrin(1977)Opening Encounters. *American Sociological Review* 42-5. pp.679-691.
- H.Sacks (1975) Everyone has to lie. in Sanches & Blount(eds.), *Sociocultural Dimensions  
of language use*. New York:Academic.pp.57-79.